

キリシタン時代と日本人

加 賀 乙 彦

加賀乙彦でございます。今日は一時間半くらいお話をして、もし何かご質問があったら少しお受けしようかな、という風に思っております。

さて、何故キリシタン時代か。

キリシタン時代というのは1549年から1614年まで、なんですね。そのだいたい65年くらいの間の時代のことを、キリシタン時代、と仮に呼んでおります。

その1549年に何があったかという、フランシスコ＝ザビエルが鹿児島に上陸して、日本に布教を始めた。ザビエルはだいたい日本に2年と2ヶ月いたわけです。たった2年と2ヶ月ですけど、そのザビエルの影響というのは大変に大きくて、その後のキリシタン時代という、日本に百人を越すヨーロッパからの宣教師がきて、もう本当に黄金時代だと思いますが、その時代を開く。

その後、天正15年、1587年に秀吉の伴天連追放令というのがありまして一時下火になるんですが、また勢いをふきかえしたところへ、慶長19年、つまり1614年に、徳川家康の伴天連追放令、これは日本からキリシタンを全く追放してしまおう、キリスト教の信仰を持った人間は殺す、という禁教令が出てしまう。

私が何故この時代のことに関心を持ったかといいますと、私は『永遠の都』という小説を書いておまして、これは昭和10年から昭和22年までの日本の現代史を背景にしたある一家の物語、今は新潮文庫に入っています7巻本でとても長い小説なんですけど、それを書いているときに、戦争中のカトリックとプロテスタント、つまりキリスト教徒がいかに駄

目だったか、ということに気がついた。

つまり戦争反対、平和運動っていうものにほとんど参加せずに、時代に流されて、特にプロテスタントは最も鮮明に戦争協力をうちだしました。また、カトリックの方も反対はしなかった。賛成して、教会では、日本の兵士のために祈りをするし、慰問袋を作ったり献金をしたりっていう戦争協力をやったんですね。

戦後、カトリック教会で、またプロテスタントでも、そのことについての反省があって、私もいかに戦争中のキリスト教徒は駄目であったか、というようなことを学んでみて、何故あれだけ平和を愛し、また平和を主張すべきキリスト教徒が、少なくとも満州事変以後は、日本の軍国主義にまみれてしまって、戦争協力一辺倒になってしまったのか、ということは、調べれば調べるほど憂鬱になりました。

戦争中からずっとおられた神父様、特に外国人の神父にお聞きすると、その時代のことは話したくない、と、皆拒否されるので、ほとんどお聞きすることはできない。では教会に、戦争中のカトリック教徒の行為についての記録は残ってるか、と言うと、これはまたほとんどの教会で、戦争協力をしたという過去を消すために、文書を焼却して過去を抹殺してしまっているのです。

私が洗礼を受けたのは1987年、58歳のときなんです、それからしばらくしてその小説『永遠の都』を書き始めたものですから、しまったと思った。こんな宗教に帰依してしまって。この宗教は、戦争反対もしない、だらしない宗教であったじゃないか。何だ、失敗したぞ、と私の師匠の遠藤周作に言ったら、へへへ、だからたぶらかされるなとあれほど言ったじゃないか、なんて言ってちっとも本気にしてくれないのですが、私は心ひそかに小さな心を痛めておりました、悩んでおりました。

その後ずっといろんな本を読んでいるうちに、ある日、キリシタン時代の本を読んだ。特に、家康の禁教令が出た後、天草の乱にいたるまで、いかに日本のキリスト教徒が時の権力に反対し、そのため殉教し自分の信仰を守って行ったか、というその歴史を読みまして、そういう時代もあったんだと、やっと安心した。

安心して、ならば、もう少しあのキリシタン時代というものの意義を考え直してもいいんじゃないかと、あの時代の日本人は立派だったん

じゃないかと、そして戦争中の日本人は駄目だったんじゃないかと、この比較の上に自分の信仰の問題を考えたいと。これはもう本当に個人的なモチベーションといいますか、で、ザビエルという人を調べ始めた。

それです、スペインの方、ザビエル城へ行ってみました。パンプローナという町、ご存知だと思いますが、ピレネー山脈のふもとにあって、バスクの中心になる町で、毎年、町の中を牛が走りまわって、牛追いというよりは、住民がその牛の前を逃げて、という、非常に面白いお祭りをやる町です。

そのパンプローナのすぐそばにザビエル城っていう城があって、そこに行きました。ザビエルというのは実には大きなお城の城主の息子です、まあ三男で、末っ子ではあったんですけども。その立派な城主の息子が、では何故日本に来たか、ということが問題になってくる。

イグナチオ・デ・ロヨラという、ザビエルよりも15歳くらい年上ですけども、しかし親しい友人であった人が、イエズス会を作ったんですね。このイグナチオ・デ・ロヨラもバスクの人。ザビエル城のすぐそばに、ロヨラの住んでいた家が今でも残っております。

もうひとつそのザビエル城で、たいへん私が感心したのは、ザビエルが毎日お祈りをしていた小さいお御堂があって、そこに木造の磔刑像があります。その磔刑像のイエスが微笑んでいる。十字架の上でね。で、微笑みのイエスという。今度出ます私の本の、『ザビエルとその弟子』の表紙にその微笑みのイエスを使いましたが、本屋に行ってみて、ちょっと買ってやろうかな、というぐらい思ってね、買って読んでいただけるとありがたいです。

その微笑みのイエスは歯が、ちょっと見える。十字架上のイエスが微笑むという、そのことが、実に不思議な事であって、ギブソン監督の「パッション」という映画、ごらんになった方も多いと思いますけれども、私は、あれが本当だと思うんです。受難というのはああいう風に行われて、鞭打ちから茨の冠、そして十字架の道行き、最後に釘付けにされるイエス、というのは全部、四福音書にきれいに、美しい文章で書かれています、短いのですから、うっかり読み過ぎすわけですけども、しかし、あの受難のイエスは、人間、肉の人間として最高の苦しみを受けた、苦

痛を受けた。ギブソンの映画を見てると、もうこれ以上の苦痛はないっていうくらいの苦痛を受けたわけですね。

その苦痛を受けたイエスが微笑んでいる、というのが、ザビエル城の磔刑像です。微笑んでいるということは、自分が十字架につけられるということはもちろん知ってたわけですね、前の日から。ゲッセマネの祈りもあって、それから大祭司カイヤファの裁判があって、結局ポンティオ・ピラトに十字架につけられるという命令を受けて、という一連の出来事は、木曜日の夜から金曜日の午後3時くらいまでですから、24時間ない間の、ごく短い間のできごとなんだけれども、あれがキリスト教の全ての源になっていて。そして、キリスト教会で一番そのことを大事にしたのは、やっぱりイエズス会だったんじゃないかと思うのです。

それは何故かという、イグナチオ・デ・ロヨラの書いた『靈操』という本があります。これは岩波文庫に門脇佳吉神父が訳されたのが最近出ましたが、「靈操」というのは、イエスの一生をずっと生き生きと思い浮かべる、頭の体操です。霊の体操だから「靈操」ですね。だからあれは、エグゼルシスなんですね。

そのエグゼルシスの中で一番大事なのは、イエスの苦難の道行きを、生き生きと体験するということだとロヨラは言っている。そして、そのことを、つまりイグナチオの「靈操」を一番忠実に行ったのが、実はザビエルだったんじゃないかという風に、私は読みました。

ザビエルが日本に来たのは1549年、いごよくなるの年ですね。何故日本に来たかという、これはその2年前に偶然、マラッカで、ある日本人に会ったから。その日本人の名前はヤジロウと言われたりアンジロウと言われたりいたしますけれども、ザビエルの書簡にはアンジロウという風を書いてあるので、一応私はアンジロウと呼ぶことにいたしておりますが、このアンジロウに、ザビエルがある日会った。

ザビエルで大事なのは、ゴアと、マラッカと、サンチャン島(上川島)なんですね。何故大事かっていう話をいたしますと、まずザビエルという人はですね、さっき言ったパンプローナのすぐ側に生まれて、大変な大金持ちの城主の息子なんですが、パリへ勉強に行って、そしてイグナチオに出会って、回心をする。

ザビエルの国、要するにバスクのナバラ王国というのは、スペイン軍

に滅ぼされる。今ではザビエル城もロヨラの家もすべてスペイン領になっていますけれども、もともとはあそこはナバラ王国と言って、バスク人を中心とする独立国であった。それをスペインが併合するわけですよ。そうして亡国の民になるわけです、ザビエルは。そして、勉強のために、フランスのパリへ行く。

そのパリでイグナチオと意気投合して、1534年、28歳のときに、モンマルトルの丘の上で誓いを立てます。これが「モンマルトルの丘の誓い」というので、七人の若い神父たちが、これからは清貧を旨として、そして異教徒に、つまり東洋の方に布教に行くことによって、カトリックを再興したいとした誓いです。なぜならその頃、宗教戦争の真っ只中でありまして、ドイツ、オランダあたりでは新興のプロテスタントの国ができていて、カトリックの勢力というのはやや下火になっていた。それを復興したい、という若いカトリックの神父たちのつどいであったわけです。

ザビエルはそのイグナチオの秘書として、ローマで活動を始めますが、ある日、東洋に向かって派遣する神父が熱病にかかって行けなくなりました。その人の代わりに行かせる人がいない。イグナチオが見ると、目の前にザビエルが立っている。あんた行ってくれるか、って言ったら、はい、って言った。ザビエルはそのイグナチオの一言で東洋布教に行くことになる。これをある神父から伺ったとき、じゃあザビエルは一日か二日考えさせてくれって言ったんですか、と聞いたら、そうじゃない。あなた行ってくれるか、と言ったら、即座に行く、って答えたんだそうです。

そうしてザビエルは、私でよろしかったら、喜んですぐ東洋布教に参りますと、すぐローマ教皇に会いに行った。しかし着ていくものがない、ボロボロの服しかないの、糸でもって急いでその服を直し、それから下着が2枚しかなかったの、たぶん洗ってなかったんじゃないかな、それはわからないですけど、それを夜までかかって穴を塞いで、その下着2枚と直した小さなボロツきれのようなスータン（祭服）を持って、リスボンに行った。

リスボンにしばらくいる間に、その時のポルトガルの国王、ジョアン二世に非常に可愛がられて、というか若いのに非常に尊敬されて、もう

このままりスボンにいなさいって言われるんだけど、いや、私はイグナチオの命令でマラッカに行くんだと、いうのでマラッカに行くんですね。それがまだ若い頃なんです。1541年、35歳のときですね。

そのリスボンを出航して、インドのゴアまでなんと1年と1ヶ月かかった。途中、嵐に何度もあい、海賊に追っかけられ、船の中には熱病があって、船員たちがバタバタ死んでしまう。そういうものすごい航海をした末にゴアに着く。そしてゴアを中心にしてインド布教を始めるんです。その当時のインドはイスラムの国でした。

今このゴアに行ったらごらんになると、まずインドのニューデリーに行きますとね、巡礼団がいっぱいいるんですよ。そのみなさんがどこへ行くかっていうと、みんな釈迦の生まれたところへ行くという巡礼団で、キリスト教徒の巡礼団にはついに会わなかったです。そして、ニューデリーからインドの国内航空で1時間ほど、ゴアについたら、日本人は我々の一行だけで、つまり日本からの巡礼団はゴアにあんまり行かないらしいです。しかしあそこに行って私がびっくりしたのは、ポルトガルの本国にもほとんどないような大きなカテドラルがあった。これは世界遺産になってます。

そして、ボン・ジェズスという教会があって、そこにフランシスコ・ザビエルの遺体が安置されてあります。腐ってないんですね、これは奇跡なんです。薬を使っているわけではない。それが水晶のお櫃に入れて、飾ってあります。誰でも見ることができます。

ザビエルっていうのは、大変に体の立派な方で、鼻がぼんと突き出ている。

私の一行がそのボン・ジェズス教会に行ったのは、2001年だったと思いますが、そこで非常に大きな感銘を受けたのは、この人が日本に始めてヨーロッパの文化をもたらしてくれた人で、その人の遺体がいまだに腐らずに、そして多少ミイラ化してますけれども、完全な姿で、このゴアにある、ということです。

ゴアは1960年までずっとポルトガル領であって、これは街じゃなくて一つの州です。ずいぶん広いんですよ、ゴアっていうのは。ですから、今でもポルトガル系の住民が多いんです。インドの中では異色の場所です。そしてたくさんの教会があって、ポルトガル系の神父さんが大勢い

るし、ほとんど全世界から、ザビエル巡礼という人たちが集まって来ています。

私たちはそこに約一週間いましたが、ついに日本人に会わなかった。つまり日本の方はゴアに巡礼するっていう気持ちは、あまりお持ちにならないな、ということがそのときわかったんですが。しかし、日本にキリスト教をもたらしてくれた大恩人のご遺体ですから、巡礼してあげてくださいよ。

そしてその次にマラッカに行きました。マラッカには何があるかっていうと、ザビエルが亡くなった時に遺体を安置した穴が残っています。「丘の上の聖母教会」というところです。マラッカというのは、海の近くにある要塞みたいなところで、その丘の上の聖母教会から見下ろすと、たいへん景色がいい。おそらくザビエル時代にはすぐ前に海があったんでしょう。その後、埋め立てが行われたものですから、今では海はずっと遠くにありますけれども、ザビエル時代にはすぐ真下に海があって、マラッカの港から日本へ向かってどんどん宣教団が出発したという光景は、生き生きと想像することができるんですね。

ザビエルは、インド布教をしたあとマラッカへ来た。マラッカやマレーシアは、これは今でもそうですが、イスラム教国で、キリスト教に対してなかなか抵抗が強い。そこでポルトガルは、お城みたいな、つまり城塞をつくって、点の占領をする。

これは、ちょっと脱線しますが、キリシタン時代の、つまり大航海時代の宣教っていうのは、ポルトガルとスペインの2つの国が主でした。そして、ポルトガルは東回りに来たんですね。スペインは西回り。

ですから、西回りに行ったコロンブスはアメリカ大陸を発見して、そして殆どの東・南アメリカを全部スペイン領にした。それより北の方に、まだ現在のアメリカ合衆国だの、カナダだのがあるっていうようには、あの人たちは思わなかったので、もっと北のほうに行けばもっと広い領地を得られたんでしょうけれども、とにかくメキシコを侵略することで我慢して、そして更に西に行きまして、そこでスペイン人が到達したのがフィリピンで、フィリピンを植民地にした。

そうすると、ちょうどオランダがインドネシアを占領して、その接点

になったのがチモールですよね。チモールはポルトガル領だった。だからカトリック教徒です。その西の方はイスラムになっちゃった。そういう歴史が16世紀にあったんです。

日本はポルトガル人が来て良かったんですよ。スペイン人が来たら、たぶん植民地にされたでしょうね。これはもう、銀はとれるし金はとれるし、日本人は勤勉で奴隷にするにはもってこいだから、てなことを考えたに違いない。実際スペインはそういう国でして、スペインの植民地政策っていうのは、領土を取る。

ポルトガルは、東へ東へと行って、まずゴアにつきあたって、インドを取ろうとしたんだけどあまりにもインドが大きくなって取れなかった。そこでゴアだけ取った、というわけですね。そして更に東へ行って、中国を侵略しようとしたけど、中国も大きすぎてしょうがないからマラッカだけいただいて、それからマカオ。みんな点ですね、ポルトガルは。

そして日本へ来たときに、ザビエルも、日本に対する領土的な野心というのは持たないで、むしろ布教を主にしてやりたい、という風に思った。

そのザビエルが日本に来るには、非常に不思議な偶然がありました。ザビエルはインド布教のあとには、中国布教を考えてたんですね。しかし、その中国の東の方の海の向こうに、マルコ・ポーロが書いた、ジパング、っていう国があるらしい、っていうことは知っていた。だけど日本人なんてどこでも会ったことがないし、見ないし、どんな人種かもわからない。まず中国を布教の対象にしよう、と思っていたところに、1547年ですから、ザビエルが日本に来る2年前、偶然日本人のアンジロウというのがやってくるんですね、マラッカに。

このアンジロウというのは鹿児島の人で、鹿児島で人殺しをして、故国を追われて逃げ回っていた。で、逃げ回っていたうちに、どうもマラッカにザビエルというすばらしい神父がいるらしい、という噂を聞いて、その神父に会いたいと思ってマラッカに行くんですが、そのときザビエルがちょうどいなかったんですね。代わりに留守番神父がいたんですが、その神父がこう言った。「お前はキリスト教徒ではないはず。キリスト教に関心があるのか」、「あります」、「お前の女房は何教徒だ」、「仏教徒です」。異教徒を妻にしている人間に、キリスト教の洗礼をさずけるわけに

はいかん、帰れ帰れ、と追い返されちゃったんです。

それで日本人アンジロウは、がっかりして日本に帰ろうと思ったんだけど、台風にあって、またマラッカに吹き寄せられて帰ってきちゃった。そしたらザビエルがいたんです。この辺の事情は非常に複雑というか、不思議というか、偶然が重なった。たまたまそのとき、丘の上の聖母教会にザビエルがいて、そこへ、アンジロウがポルトガル人に連れられてやってきた。アンジロウはポルトガル語が少し話せた。片言ですけれども、話せた。

そして、ザビエルはアンジロウに会って、初めて日本人を見た。はあ、こういう顔をして、なかなか精悍な細長い顔つきで、いい顔つきをしてるし、一生懸命だ、と。よく聞いてみると、人殺しをして、その罪を、キリスト教では赦してもらえるのかどうか、ということに夢中になっていて、そこでアンジロウは、一晚二晩とザビエルに招かれて、日本の話をするわけです、知ってることを全部話す。だんだんに詳しく話す。

すると、日本という国はもう千年も前から仏教は渡来していて、読み書きのできる人間が大勢いて、文明国であるというのがよくわかった。アンジロウ自身がなかなかの人物で、日本の歴史についても良く知っているし、仏教についてもある程度の知識はあるし。それでザビエルはこう考えたんですね、中国は後回しにしよう、まず日本に行ってみよう。

アンジロウ、お前の国に行きたい、と、だけどそれにしてはお前は、ラテン語もポルトガル語もよくできないし、ちょっと勉強して来い、って、アンジロウを、ゴアの聖信教会、スペイン語ではサンタフェ、あるいはパウロ学院とも申しますが、そこへ行って勉強させるんです。

このゴアの聖信教会っていうのは、東洋人の子弟のための教会なんです。その人たちに、ポルトガル語とラテン語とキリスト教の教義を教えて、宣教の時の手伝いをさせる。そういう人を養成する学校だったんですね。アンジロウはそこに入って、たちまち頭角をあらわす。あっという間にポルトガル語をマスターし、ラテン語をマスターし、2、3ヶ月でほぼなめらかに言葉が話せるようになる。大変な秀才だったらしいです。

そして、ザビエルは喜んでアンジロウに洗礼をさずける。アンジロウは召使を連れてたんですが、その召使と、それからもう一人日本人の奴

隷がいたのを(あの頃奴隷がいたんですよ), ザビエルが買いまして, 自分の弟子にして, この3人の日本人に洗礼を授ける。

これが1548年の5月で, この時おそらく日本人最初のキリシタン, キリスト教徒が生まれたわけです。その3人の日本人を連れて, ザビエルが日本に来たのがその翌年です。

この日本への航海は, 大変に難儀だったです。まず, あの頃の航海術では, 中国へ行くのは非常に簡単だったんですが, 日本へ行くというと, 逆風なんですね。貿易風がいつも逆に吹いているし, それから台風がたくさんあって, 嵐にもまれなくちゃならない。特に, 7月8月は台風が非常に多かった。

ザビエルが乗った船はマラッカでみつけたジャンクです。中国風の船だったのですが, 中国人の船長はどうしても日本へ行きたくない, マラッカへ帰りたいと言う。途中でとうとう船長の娘が海へ落ちて死んでしまう, 不吉だ, と, そういう風なことがあって, どうしても行こうとしないんですが, ザビエルはひたすらに船の舳先に立って祈る。

ザビエルのお祈りってというのは効くらしいですよ, どうも。いろんなところで危難にあったとき, ザビエルが一生懸命祈ると, 何かその危難からすっと脱出できる, 不思議な力があつたみたいです。そのときも, 弟子のアンジロウでさえハラハラして, わが先生は一生懸命祈っているけれども, 船長の言うように早くマラッカに引き返した方がいいんじゃないのかなあ, と思いながら見ていると, ザビエルは断固としてお祈りをしている。

そのうち風がびゅうっと鹿児島の方に吹きだして, 気がつくと, 8月15日の聖母被昇天の祝日に, 鹿児島港に着いちゃった。船長は何もしないうちに風が勝手に導いた感じになっちゃって, 着いちゃうんです。

そして, 時の殿様, 島津の貴久という, 丁度薩摩の三国, 大隈半島と薩摩半島とを占領して, という, 威勢堂々たる島津の殿様に, ザビエルが会うんです。このときにザビエルが持って行ったのが, いわゆる聖母像, 油絵。これは誰の作品かわからないんですけどね。

その当時, ポルトガル人もスペイン人も, 布教をし, 貿易をするのに, 女の人には絶対に連れて行かなかった。男だけで行った。したがって, 日本人も, それから例えばメキシコの人, 西洋の女の人っていうのは見

たことがない。

日本人もちろんそうです、宣教師は全員男ですから。それで、その聖母子像を見たときに、西洋の女っていうのは実に美しいし神々しいと。そこで島津の殿様は、はっと平伏した、そうするとそこにいた家臣たちがいっせいに平伏した。と、これはアンジロウが書いてます。

私はそれは少しオーバーだったんじゃないかなと思って、私の小説の中ではちょっと頭を下げたのを、アンジロウがザビエルに報告するとき、平伏をしました、って言ったことにしましたが、これは小説家の勝手な歴史捏造です。

ただ、私は、これは大変立派なルネサンス時代の絵だったと思うんです。ご承知のように、ルネサンスがいつ終わったかという、16世紀の丁度半ばですよ。ザビエルが日本に来たのはルネサンスが終わった頃です。

ルネサンスは13世紀からはじまりますが、一番ルネサンスが花開くのは、15世紀から16世紀ですね。そのルネサンスの最後を飾る天才がミケランジェロですよ。ミケランジェロの、システィナ礼拝堂の「最後の晩餐」が描かれましたのが16世紀の初めのことですから、ちょうどザビエルがローマに行っていたころです。ミケランジェロに会ったかどうかは知りませんけれども。

つまり、日本という国は、ルネサンスが終ってから初めてヨーロッパと接触した国なんです。我々は今、ルネサンスというと、何か日本の文化に直結するように思っていますし、ダヴィンチだとかミケランジェロだとかをみんな、日本人の科学あるいは絵画、そういうものの、師匠みたいに思っているけれども、ザビエルが来たときもうルネサンスは終わったんだから。ダヴィンチもミケランジェロもいなくなっちゃったんです。

そして、ルネサンスが終わり大航海時代が来て、ベネチアとフィレンツェの時代じゃなくて、ポルトガルとスペインの時代になってたんですから、日本人は、なんと、1500年近く、キリスト教と文化を知らなかったんです。実に不思議ですよ。そして、ザビエルによって初めて、ヨーロッパのキリスト教と文化を知るんです。

ザビエルが来る数年前に、種子島に鉄砲が伝来しました。しかし、鉄

砲を伝来させたポルトガル人は、鉄砲を売って金を儲けると帰っちゃうんですね、たぶんゴアに帰ったと思われませんが。で、何も文化は伝えない。

ところがザビエルは、まず日本人に、ヨーロッパの文明、文化、歴史、そういうものを教えようということを考える。その考えが生じたのは、アンジロウが非常にポルトガル語に堪能になって、ザビエルの話すことを通訳できるようになったからです。

それで、鹿児島人に対して最初に教えたのは、地球は丸いってことですよね。その頃まで日本人は、地球は丸いなんて聞いたこともない。地球は丸い、したがってこの尊い神父様方は、地球の裏側からやってきたと、ええっ、そんなことあるのかな、と。

そして、地球と月との関係で、潮の満ち干が来るといって、その法則を漁師たちに教えた。だいたい月が地平線に出たときに満潮になる、真上に来たときには引き潮になる。何故か。それは重力の関係で、月の重力の作用がすこし遅れてくるからだ。というような法則だとか、それから、雨が降るのは水が蒸発して雲になって、雲が氷になって落ちてくる、という理屈だとか。そういうことはみんな、ザビエルが日本人に最初に教えたので、これは鹿児島の人たちはビックリ仰天するわけです。

そして、ザビエルが持ってきたものの中に、時計がありました。機械仕掛けの時計ですね。それからもちろん楽器がありました。ハープシコードですね、それから、フルートも持ってきました。そういうものを演奏するだけの技術を、その当時の宣教師は持っていた。

結局島津の殿様は、大歓迎するわけです、布教の許可を与える。だけど、島津の殿様の魂胆はすぐわかるので、貿易はして儲けたいし、新しいものは欲しいが、キリスト教は欲しくない。島津の殿様の土地は、日蓮宗が非常に盛んで、まあ日蓮宗っていうのは非常に闘争的ですからね、皆さんの中にもいらしたらごめんなさいね。要するに新しいヨーロッパの坊主が来たっていうんで迫害しようとするんです。

ザビエルは、辻説法をするときに、まず、坊主たちの男色を攻撃した。だいたい、今も鹿児島は稚児趣味っていうのが非常に盛んで、そんなこと言ったら鹿児島の人に怒られますが、昔はすごかったんですね。お寺の坊さんが、少年たちに何かちょっと悪さをするとか、そういうことは

しょっちゅうあって、そのことをザビエルが知って、大変に怒って、説教の中で言う。

ザビエルは大体、お寺の階段の上に立って、大きな声で、アンジロウが書いたローマ字の説教を読み上げる。ところが、発音がめちゃくちゃだから聞いてる人は何を言ってるか全然わからない。それを、アンジロウがわかるようにまたやり直す。ザビエルが坊さんの悪口を言うと、なるべく坊さんの悪口じゃないように、アンジロウが少し優しく言い直す。まあちょっとインチキをやったんですが。

しかしザビエルという人は、まずこういう人でした。激しい。ものすごく激しい。そして、人に対する怒り、それから叱責、そういうことはものすごい。まあこれは貴族の一つの特徴かもしれませんが。そして異教徒に対する極度の軽蔑の念があった。そのことはよい面と悪い面がありまして、良い面では、キリスト教っていうものを深く浸透させる原動力にはなった。しかし一方、その当時の鹿児島の方さんたちの反発を買った。もっとおだやかな対応が必要だったと思われるのに、それを飛び越していきなり相手を糾弾する、っていうところから始めたので、鹿児島での布教はうまくいかなくなったのです。

そしてザビエルは平戸へ行きます。ザビエルといっしょに来たのは、トルレスという神父と、フェルナンデスという修道士です。フェルナンデス修道士は若くて22, 3歳で、日本語が非常にすぐ堪能になった。トルレスは非常にまじめな温厚な人で、ザビエルのようにすぐ怒らない。

ザビエルはその後山口に行きますね、平戸の次に。山口では、陶晴賢の反乱というのがあって、これは日本史をご存知の方は知ってると思う。大内家を滅ぼして、陶晴賢が反乱を起こす。その陶晴賢を毛利がやっつけて、結局あそこは毛利領になるわけですけども、その毛利の殿様は、それほどキリスト教を弾圧した殿様は他にいないくらい、ひどい弾圧をする。

そこで一行は大分県にわたって、大友宗麟のところで布教をする。だからその後、大分が布教の中心になります。大分と、それから臼杵ですね。今でも臼杵というのは、キリスト教徒が多いでしょう。野上弥生子さんのふるさとで、野上弥生子文学館がありますし、戦災を受けてないから古い町並みがあるまま残っている、私も大好きな町ですが、あそこ

を拠点にして、布教をするんです。そして、ザビエルの弟子であるアルメイダという人が日本で始めての病院を、大分に作ります。ハンセン病の病院なんかもつくる。そういう文化の発祥の原点になったのは大分です。

ザビエルは、大分にて布教をしているうちに、突然不安になる。つまり自分たちのやっている布教の実績が、ローマにいるイエズス会総長イグナチオに伝わっていないんじゃないかと。ザビエルは、ずいぶんたくさんの手紙をポルトガル船に託して、マラッカやゴアに送っているのにかわからず、イグナチオから何の返事もこない。そこで、いっぺんゴアに帰ってもう一度出直してみようというので、ゴアに行くのが1552年、いや51年の暮れに行くんですね、で52年にゴアに着く。

ゴアに着いてみると、ザビエルは東洋布教長になっていました。イグナチオの命令で、東洋の全神父を束ねる人間に、まあ昇進してたというか、命じられていた。そこでザビエルは大改革を始めるんですね、インドのゴアで。いろんな人と衝突します。さっき言った聖信学院の院長があまりにも乱暴なので、もっと温厚な人に変えろとか、一生懸命やっているうちに、また日本に帰りたくなる。

日本に帰るんだけど、その前に中国に一度行ってみよう、と思うわけですね。ザビエルがそのとき中国に行こうと思ったのは、布教で日本に来て、仏教の坊主ども、ザビエルはボンズっていうんですね、そのボンズどもとうまくいかなかった。ところが日本のボンズどもが尊敬してるのはみんな中国のボンズだ、中国から仏教がわたってきた。そこでザビエルは考えたんですが、じゃあ中国のボンズどもをまず折伏しちゃえ。彼らを何とか説得すれば、日本のボンズどもはなびくであろうと。

こういうところ単純というか、極端というか、勇敢だというか、猪突猛進というか、とにかくそういう人で。そこでザビエルが考えたのは、自分の友人をポルトガル国王の名代にして、自分はローマ教皇の名代として、堂々と中国に乗り込んで行って、北京の王様に会って、布教の許可を受けようというんです。

そしたらね、事件が起きまして。ポルトガル人が、寧波っていうところで、略奪をしたんです、中国人に。これは海賊がやったらしいんですが。それで、国王、中国っていっても明の時代ですから、その明国の国

王の待遇が、急に反ポルトガルになって、ポルトガル人はみんな逮捕しようってことになって、ザビエルの計画はみんなだめになっちゃった。中国に行くこともだめになった。

それでもザビエルは中国に行こうと思っていろいろやるんですけども、結局、マラッカにいましたアタイデという海軍総督が、ザビエルに反対するんですね。なぜならば、その当時のポルトガル人は、サンチャン島という小さい島で密貿易をやって、儲けてたんです。そのサンチャン島まで行くのはいいけれど、中国本土まで行ったらとっつかまってひどい目にあうし、サンチャン島での密貿易もできなくなってしまう、われわれの利益もなくなっちゃう、というんで、ザビエルに反対する。

それで、ザビエルが結局は、国王使節と自分が教皇使節であることもあきらめて、とにかく身一つで中国本土に渡って、布教してみよう、という覚悟をするのが、1552年の4月、つまり日本を発ってからちょうど6ヶ月くらい経ってからですね。それで、サンチャン島に行くんです。

だけど、サンチャン島に行ったけれども、中国に渡る手立ては全然ない。そして、中国ではひどい目にあうというので、弟子の一人が逃げ出してしまふ。残ったのはアントニオっていう中国人の神学生一人であって、ポルトガル人もみんなザビエルを見捨てて、マラッカに帰ってしまふ。結局ザビエルは自分ひとりで、アントニオを連れて中国に行こうと思って、苦心惨憺をする。

そのとき、ザビエルが持っていたのは、胡椒200クルサド。その当時胡椒と金の値段はほぼ重さで同じくらいで、胡椒っていうのは貴重なものだったんですよ。その胡椒を持っていた。その胡椒を中国人に与えるから、ひそかに中国本土に渡してくれという、そういう約束をされていて、待っていたんだけど、待った日に中国人がやってこない。そこで、ザビエルは病に倒れます。結局、しばらくして死んでしまうんですが、そのとき最期まで枕元において、ザビエルを看病したのがアントニオという中国人でした。1552年12月3日のことでした。

私がサンチャン島へ行きましたのは、2002年12月3日で、丁度ザビエルが亡くなってから450年後です。巡礼団を組んで行きました。私一人では行けないんですよ、ああいうところにはなかなか。何故かっていうと、

バスを借りて行くのに、一人で借りきって行くとすごくお金がかかる。だから必ず巡礼団を組んで、なるべくイグナチオ教会とか、大きい教会でもって、誰か行きませんか行きませんか、ってやるとたいてい30人ほど集まってくださるので、その人たちを引き連れて、私の洗礼神父である門脇佳吉神父に声をかけて、二人で巡礼団を率いて、サンチャン島に行ったんです。

大変なところでしたなあ。つまりね、まず香港に行くでしょう。その香港からマカオに行く、これがまた大変です。同じ中国なんですけど、全然システムが違うんです、今は。要するに、中国本土のシステムを香港ではとっていない。だから香港は、あの簡体字っていう、中国の新しい簡単な字は全然使ってない。全部古い字で看板が書いてありますよね。

で、その隣のマカオへ行くのにまた税関がありまして、マカオへ入るとこれがとたんにポルトガル風の町で、ヨーロッパへ来たなと思われるような、自動車がものすごく多くって、ここが中国かとびっくりする。

そして今度は、マカオから中国本土へ入るときにまた税関がありまして、その税関を通るのにすごい時間がかかるんです。私たちは30人くらいで行ったんだけど、最後の一人の入国許可がおりない。コンピュータに入力はしたんだけど何故か消えてしまって、中国本土のコンピュータにはその人の名前が入ってない。一人だけはダメだって言われて、そんな殺生なっているというので、いろいろ交渉をやって、なんとか通してもらって。

それから今度は高速の道路があるんですが、日本の高速道路っていうとあれは車が走っているでしょう。ところが自動車は全然走ってない。ですからバスはものすごい勢いで突っ走って、サンチャン島のすぐそばの町まで行った。そのバスは、速度計が壊れてましてね、時速何キロで走っているかわからないんですよ。だけど窓のところに鈴が下げてあって、何キロ以上になるとカンカンカンカンとこう、ガラスを叩くんだって運転手が言うんです。速度制限あるかって聞くと一応あるはずだけど知らんと言う。

そうして宿屋につきまして、そこから更に一時間ほど奥地の港へ行っ
て、港から更に船に乗って、一時間くらい行きますとサンチャン島に着きました。

サンチャン島に行ったら、山口教会の方々が来てました、やっぱり神父様に連れられてね。私たちは門脇神父に連れられて行って。そして、450年前に亡くなられたザビエルの命日ですから、ミサを立てた。

ところがまた問題が起きました。山口教会の神父様方が、白いスータン（祭服）をお付けになったとたんに、監視してた宗務局の役人が怒り出しまして。そういう約束はなかったと、お前たちは異教の輩なのだから、なるべく普通の格好でやれと。で、中国の人がみんな見物に来るのを警官が追い払う。

それで御ミサをやったら、鳥が一羽来てね、祭壇の上で鳴いてるんですよ。今までどこにいたのか、鳥が入ってきて、ミサの間びよびよびよびよと鳴いていまして。実に不思議でしたね。

ザビエルが帰天したとき最期まで看取ったのがアントニオです。ザビエルを葬ろうというので、中国風のお棺に入れて、私たちがミサを立てた教会はもう後世のものなんです、その上にずっと長い階段がありまして、その上の昔ザビエルのお棺を埋めた場所に、記念碑が立ってます。とにかく、ザビエルのお墓をそこに作って、その後、ザビエルをあのままそこにほっといていいのかな、ってアントニオは考える。やっぱりマラッカに連れてって差し上げたい、と思うわけ。

そのサンチャン島に、これはまあ歴史に残るポルトガル人でしょうけれど、アラガンという海賊のような男がいて、ちょっと変わってる人間なんだけど親切で、ザビエルが亡くなる時自分の小屋の中に運んで、看病してみたり、自分には医術の心得があるというので瀉血ってやって血を抜くんですね。その度にザビエルが気を失う、だんだんに弱っていく、困ったことですが、まあ、でも一生懸命に治療をする。それをアントニオがはらはらしながら見ている。

そうして、ザビエルが結局亡くなったあとしばらく、アントニオはほんとに食べるものもない、飢えるような状態で翌年の2月くらいまでサンチャン島にいるんですが、あるとき、アラガンが、ザビエルをマラッカに運ぼうじゃないかという。そこまで航海してきた、サンタクルス号というポルトガルの船だけはあった。アラガンはジャンクの船長ですけど、まあ航海術には長けている。

そこで、アラガンが船長でもってザビエルを運ぼうということになって、船員にザビエルのお墓を掘り返させるんですね。そうすると、船員がザビエルの足の筋肉を、1センチ幅の10センチくらい、切り取ってもってかえてきた。そして、アラガンがその臭いをかいでみると、少しも腐ってない。これは変じゃないかというので、まあとにかく遺体をサンタクルス号に運んでみますと、何故か腐ってない。

アントニオはすぐ、これは何か不思議なことが起きた、と思って一生懸命祈ったんですが、アラガンはこれは何かのまちがいだと、あそこの水が細菌を殺すんじゃないかとか何だとか言った。しかし、毎日毎日見るとちっとも腐らないもので、マラッカに近づくにしがって、アラガンも急に、奇跡だと思えるようになるんですね。どうもこれは奇跡だと、そりゃ大変なことだと。奇跡の神父の遺体を運ぶ、っていうことは、これはマラッカ始まって以来の大変なことだ、俺は英雄だ、って思うんですね、この辺がやっぱり俗人なんだなあ。

で、アラガンがアントニオに言うんですよ、「お前もうちょっとましな着物持ってないのか、いっつも真っ黒で埃だらけで汚いな」と。アントニオは、「私は貧乏で、もう一つ洗濯したのを持ってるが、それはもっと色がはげて、ちょろちょろですよ」と。「困った奴だな」。

それで、アラガンが船長の最高に立派な洋服を着てマラッカに降り立ちますと、マラッカ市は大変な騒ぎになる。ザビエルが出かけるときはみんな、ザビエルはもうとんでもないことやったと思ってるし、誰一人ついてこなかった。それからアタイデっていう海軍長官は、いまや総督になってました。だけどザビエルが死んでから急にハンセン病になるわけ、顔が崩れてきて。というようなことがあって、ザビエルの遺体が帰ってきたとたんに、今までアタイデという権力者にくっついてた商人や政治家たちが、全部ザビエルの方につく。

それで、港から丘の上の聖母教会まで、隊列を組んで行くんですよ。そして、そこに遇される。しかし、やっぱりマラッカよりはゴアの方が布教の拠点ですから、ゴアに連れて帰りたい、というんで、また一年ぐらい経って掘り返してみたらまだ腐ってない、遺体がね。これは大変なことだと思ったんですが、とにかく今度はマラッカからゴアに連れていくと、ゴアの総督、インド副王というんですが、勝手にインドの副王だっ

て言うんですからちょっと変なもんなんですけれど、そのインド副王という人が、港から少年たちに蠟燭を持たせて、ずっとこの、聖信教会までザビエルの遺体を運ぶ。で、ザビエルの遺体を一目見たいと、その総督は思うんだけど、神父達が断固として見せない。

一応その総督が帰ったあと、やっぱり金持ちで、教会に寄進している人たちが、一目見せてくれよ、と神父に言うんですね。そうすると、神父もやっぱり弱いんだな。だから扉を閉めてこっそり見せるんだ、そうすると、本当に腐ってない。生けるがごとくであると。で、そういうことは絶対に人に言ってはいけないと神父は言うんだけど、もちろん翌日ゴア中にその噂が流れて、ゴア中の人たちがザビエルの遺体を見て接吻したいと言い出して、長い行列を作るんです。

まだ先があるんです。ザビエルの遺体はその後、十何年経っても腐らないので、イグナチオ＝デ＝ロヨラとともに、まずは列福されます。次に列聖される時に、やっぱりローマは本当かどうか確かめたいから、右腕を切り落とせと、そうして送れと。それで、ザビエルの右腕を切り落としてローマに送って鑑定すると、本当に腐敗してないということがわかって、聖人になるんです。ですから、ゴアにあるザビエルの遺体には右腕はありません。右腕はローマのイエズス会の教会の、祭壇の右側の聖櫃箱っていう宝物箱の中であって、この右腕だけは日本に二度来てるんですね。2年前にも来ましたし、戦後すぐも来ましたし、世界中を旅行してるんです、腕が。

私が話したいのは、あのザビエルっていう方の不思議な状況というものを、もう少し私たちは考えた方がいいんじゃないか、ということです。

ザビエルの伝記で一番有名なのは、シュールハンマーっていう、上智大学の教授だったドイツ人の方が書かれたザビエル伝です。だけどあんまり長くって詳細なので出版不能で、まだ上智大学に草稿が残ってますので、それを拝見しますと、実に詳しく、本当に一生懸命お調べになって書いてあるんだけど、アンジロウのことは悪く書いてる。アンジロウは無学であって、ザビエルに対して本当の意味の通訳としては役目を果たすことはできなかった、とそう書いてある。いやそうじゃない、と私は少し憤慨しているんです、ザビエルから見ると、もちろんアンジロ

ウはそんなに学のない人であったけれども、しかしそのアンジロウが取り持ってあげた、ということは、非常に大切なできごととして私たちは記憶してもいいんじゃないか。

もう一つ、フロイスという人の『日本史』という、これもとてつもなく詳細な記録がございますね。フロイスもアンジロウについて、あんまりいいこと書いてない。アンジロウはもと海賊で、ザビエルと別れてからは中国にわたって、また海賊をやっている内に中国人に殺された、という。「という」、というところは本当に調べて書いたのではなくって、たぶん、伝聞か想像があるんだらうと思うんですが。

私はどうも、アンジロウという人を、ずっとこう、事跡を追ってみて、そんなに悪い、海賊にまた戻っちゃうような人じゃないと思う。そうじゃなくて、私が考えたのは、鹿児島で島津の殿様が禁教令を出して、ボンズたちが反乱を起こしたときに、ザビエルの一行は平戸に行きますね、そのときに、ザビエルはアンジロウに、お前は鹿児島に残って布教を続けなさいと、あそこで100人くらい受洗をさせたというんですが、その100人を守りなさい、と言う。

ところが、イエス様だってね、故郷ナザレで容れられなかった。ナザレのシナゴグで何か言おうとすると、これは大工の息子じゃないか、何だ何だ、っていうんで追い出されちゃって、預言者は故郷にあっては容れられない、なんてことを言われたくらいですから、アンジロウが故郷の鹿児島で容れられないのは当然なんだらうと。そこで、やっぱりちょっとザビエル様は冷たかったんじゃないかなと、アンジロウに対して。アンジロウ一人に任せて。それはある種の信頼の念ではありますけれど、やっぱりボンズたちの反抗にあっていたたまれなくなって、そして鹿児島を出奔して、中国に行ったときに、何らかの事情で殺された、というのが本当だらうと、これは私の小説ではこう書いてあるんですよ。まあどっちが本当かわかりませんが、小説家ってのはいい加減でね、歴史がはっきりしないところは勝手に自分で想像して書くんですが。

ただ申し上げたいのは、キリシタン時代の日本人は偉かった、ってことですよ。そして、非常に高度の知識力と理解力をもってキリスト教を理解した。特にアンジロウはそうだった。しかしやはりちょっと、イエス会の宗教方針というのは強引過ぎて、ボンズたちの抵抗にあった。そ

して、そのボンズたちの入れ知恵によって秀吉と徳川家康がキリシタンを迫害するということがあって、少なくとも慶長19年より260年間、日本ではキリシタン禁教ということになるんですが、でもその禁教になったあとに、天草の乱がありますね。

天草の乱のときに、あの原城にこもった人は3万人といわれている。そのうち、何人かはほんとのキリシタンじゃなかったかもしれない、農民一揆に近かったかもしれないけれども、少なくとも3万人近くの人たちが、時の権力に反対して、あそこで全員討ち死にをするくらいの強い信仰心をまだ持っていたということはすごいことだし、それから260年間、隠れキリシタンが日本にいたってということはすごいことです。

隠れキリシタンというのはどういう人たちかっていうと、これは、踏み絵を踏むんです。踏んで、私はキリシタンじゃありません、って言うんだけど、家に帰るときちゃんとイエスに祈り、つまり信仰を伝える。口伝えで、260年ずっと。

明治10年くらいになって、浦上の天主堂で、プティジャンっていうパリ宣教会の神父がミサをしているときに農民たちが入ってきて、ちょっと聞くけど、あんたの宗教と私の宗教はよく似てるなあ、っていう話になった。びっくりしてよく聞いてみると、これはキリスト教だと、キリスト教徒がずっと残ってた。そこで隠れキリシタンが初めてあらわになるんですけれども、そうして260年間、あのすごい弾圧の中に、日本人は、信仰を守ったっていう国民でもある。

だから私はね、キリシタン時代に関心を持つと同時に、日本人の信仰の強さって言うのに、だんだんだんだん感激をしてきまして、第二次大戦中のキリシタンのだらしないのは、赦してあげてもいいんじゃないかな、と思うようになりました。あの、日本の兵士のために天皇陛下のためにいろいろやってるっていうのも、隠れキリシタンだったのかもしれないなと思いますと、何となくわかるような気もする。今は日本人の信仰の原点として、このキリシタン時代を考えているわけです。

付記：本稿は2004年7月3日に行われた「藤女子大学キリスト教文化研究所主催 第6回公開講演会」の内容を文章化したものです。